

テサロニケ人への手紙第一2章「養い育てられた人々」

1A 使徒たちの心 1-12

1B 神に任された福音 1-5

1C 苦闘の中での宣教 1-2

2C 純粋な動機 3-5

2B ふるまい 6-12

1C 母親のような優しさ 6-8

2C 父親のような威厳 9-12

2A 苦しみを受けたテサロニケ人 13-19

1B 御言葉による苦しみ 13-16

2B 再会を切望するパウロ 17-20

本文

テサロニケ第一2章を見ていきます。私たちは前回、テサロニケ人たちが、ギリシア全域で、信仰の模範になっていることを見ました。パウロは、いつも神に感謝していて、その信仰の働き、愛の労苦、そして主イエス・キリストを待ち望む忍耐を思い起こしていました。このようにして、彼らの評判が響き渡っていたのですが、2章において、その中身を思い起こしています。つまり、パウロたちが、どのようにして彼らを、みことばによって養い育てて行ったかを思い出し、それから、彼らが神のことばを受け入れて、それで苦しみを受けていることを書いています。1章が、外に広がっている彼らの評判についてであったのに対して、2章は内で何が起こっていたかを書いていきます。

1A 使徒たちの心 1-12

1節から12節までは、使徒たちが、どのような心で彼らに働きかけていたのかを詳細に書いています。これは、福音の働きをしている者たちが模範となる心と言ってもいいでしょう。

1B 神に任された福音 1-5

1C 苦闘の中での宣教 1-2

¹ 兄弟たち。あなたがた自身がお知っているとおりに、私たちがあなたがたのところに行ったことは、無駄になりませんでした。

「無駄になっている」というのは、多くの苦しみや混乱がテサロニケで起こったのですが、それでも、彼らがしっかりと信仰に立っているのです、無駄になっていないということです。信仰の実が結ばれています。

² それどころか、ご存じのように、私たちは先にピリピで苦しみにあい、辱めを受けていたのですが、私たちの神によって勇気づけられて、激しい苦闘のうちにも神の福音をあなたがたに語りました。

ピリピにおける、パウロたちの苦しみと、辱めは覚えておられると思います。彼らは、裁きの席（ビーマ）で、むち打たれました。裁きの席は、他のローマの町もそうですが市場の前にあります。衣をはがされ、むちで打たれることは、ただ痛いということだけでなく、人前で辱めを受けるものです。はたして、これが神のみこころなのか？という疑いは、頭を何度となくよぎったことでしょう。私たちは、どうでしょうか？何か、うまくいっていない状況があります。他のキリスト者の仲間に話しても、どうも格好の悪い内容になってしまいます。けれども、それでもその中に実は神がおられた、ということ、神はしてくださいます。ここで、「私たちの神によって勇気づけられて」と、パウロは言っていますね。自分たちがうまくいっていないことで気落ちしている時にも、主が彼らを勇気づけてくださっていました。

そして、テサロニケに入ったのですが、彼らが福音を語っていくと、町中が騒動になりました。それで、ヤソンという人がパウロたちを家に迎え入れたということだけで、彼らは捕らえられ、保証金を取った上で釈放されました。パウロとシラスは、命が狙われていたので、夜のうちに町を後にしました。そうした激しい苦闘です。その中で、テサロニケの人たちに福音を語りました。私たちも、こうでありたいですね。私たち一人一人に、生活の中で課題があることでしょう。普通に考えたら、自分たちがきちんとしてから福音を語る、伝道活動に従事したいものです。けれども、いろいろな条件が整わない中でも、それでも、主に言われていることを行っていくことは大切です。

2C 純粋な動機 3-5

³ 私たちの勧めは、誤りから出ているものでも、不純な心から出ているものでもなく、だましごとでもありません。⁴ むしろ私たちは、神に認められて福音を委ねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせるのではなく、私たちの心をお調べになる神に喜んでいただくこととして、語っているのです。⁵ あなたがたが知っているとおりに、私たちは今まで、へつらいのこぼばを用いたり、貪りの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。

パウロは、安息日で三回のみ教えただけで、騒動が起こり、そこを出て行かなければいけません。このような混乱の中で出て行って、それで残されたテサロニケ人信者たちに、パウロを批判する者たちがいたようです。当時、巡回をしている預言者や伝道者に、不純な心から行っている者たちがいました。へつらいのこぼばを使ったりして、敬虔を利得の手段としていた者たちがいました。パウロも、そういった者の一人だとして批評したのです。そこでパウロは弁明します。

パウロは、テサロニケ人たちとの、人と人の関係を非常に重んじていました。主の働きというのは、生の人と人の付き合いがあって、その中で、主にあって培われていく信頼関係の中で前進し

ていきます。ビジネスのように、共通の利益のために連携するようなものではありません。互いに仕え合う、兄弟愛の中で育っていくものです。交わりがとても大事です。したがって、今ここで、テサロニケ人の信者が、他者からパウロについてのよからぬことを聞いています。自分たちの間にある直接の信頼関係が、第三者からの情報によってその関係を揺るがす、ということをサタンは、常套手段で使います。パウロは、自己弁護のためではなく、テサロニケ人たちがパウロたちの語った福音にしっかり立っていることができるように、自分たちに対する批判の弁明をしています。

3 節で、誤った教えをしていないと告げています。誤った教えには、元々、不純な心があります。自分が利益を得るために、隠れた動機で敬虔さを利用するのです。いかにも靈的に装って、違うことを考えています。そして、そこに、だましごとが入ります。真実を言っているのですが、それは表向きで実は嘘八百なのです。

しかし、真実な福音宣教について、4 節で述べています。人に認められてるのではなく、神に認められて福音を委ねられています。私は、誰々によって認められたのだとことさらに強調している人に気をつけてください。そして、神に認められたのですから、喜ばせるのは神であります。人相手ではありません。私たちが、他人がどう自分を思うか？という視点で福音の働きをしたら、大きな過ちを犯します。すべては主に対して行っています。

そして、5 節で、「へつらいのことば」と言っています。へつらい、つまり、いかにも靈的に聞こえる言葉です。いかにも優れたことを言っている言葉です。「あの人は、私の気持ちを分かってくれる。」と思わせます。イエス様のみことばを思い出してください、真理はいつも心を刺します！そして、「貪りの口実を設けたりしたことはありません」と言っています。これは、上手に献金をするように説得します。自分自身がもうけるためです。

2B ふるまい 6-12

パウロは、さらにテサロニケの人たちに対して、深い愛情の念を分かち合っています。

1C 母親のような優しさ 6-8

⁶ また私たちは、あなたがたからも、ほかの人たちからも、人からの栄誉は求めませんでした。⁷ キリストの使徒として権威を主張することもできましたが、あなたがたの間では幼子になりました。私たちは、自分の子どもたちを養育する母親のように、⁸ あなたがたをいとおしく思い、神の福音だけではなく、自分自身のいのちまで、喜んであなたがたに与えたいと思っています。あなたがたが私たちの愛する者となったからです。

福音宣教の働き、奉仕の務めについて、一般に認められている人々がいます。キリスト教の世界で、著名な人々です。そういった人々の中では、二種類の人たちがいます。会うと分かります。

一つは、個々の人々に付き合おうとして、祈り、また励まそうとし、時には時間を割いてその人のために何とかしようとする人です。仕える姿勢を取り、優しく接します。非常に多くの人々に知られているのに、まるでそれを感じさせない人です。こういった人は、主イエスご自身に倣っていますね。主には、大勢の人々が近づいていましたが、しかし、目の見えない人と語られました。取税人ザアカイの家に入られました。心の貧しい人々のすぐそばにおられました。

著名な人々には、残念ながら、表で語っているすばらしいこととは裏腹に、個々の人々と付き合うこと、相手を敬うことがない人々がいます。自分に与えられている評判や地位にしか興味がなく、自分をよく言ってくる人々を周りに付けています。そして、自分が敵だとみなした人には、徹底的に攻撃してきます。表の姿と裏の姿が大きく乖離しているのです。パウロは、このような表裏が乖離している人々を、「人からの栄誉を求めている人」と言っています。権威をふりかざしている人です。そうでない前者の人々については、自分自身が「幼子になる」ような人だと言っています。

そして、パウロたちは、自分たちのことを「自分の子どもたちを養い育てる母親」のように、いとおしく思っていたということです。子どもたちを養い育てる母親ほど、愛のゆえに自己犠牲をする存在はありません。自分の子が38度の熱を出したら、母親はその子のために、不眠不休で何でもしますが、自分自身が38度の熱を出しても、その子のためにご飯を作ってあげます。まさに自分の命を削る、というのはこういうことを言いますね。愛する子のためなら、何でもします。そのことをパウロは、ここで話しています。

パウロは、コリントの人たちに対して、「I コリ 4:15b この私が、福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。」と言いました。自分の働きによって、神が人々を新たにご自分のものとしてくださるのを見る時に、まるで、夫婦に子が産まれるのと同じような思いになります。今まで経験しなかったような愛情が生まれます。その愛情をもって、キリストにある大人になるべく、あらゆることをしようとします。それゆえ、その救われた人が信仰から離れたり、真つ当な理由がないのに教会から離れたりする時は、心が一部、切り裂かれたような思いになります。

2C 父親のような威厳 9-12

⁹ 兄弟たち。あなたがたは私たちの労苦と辛苦を覚えているでしょう。私たちは、あなたがたのだれにも負担をかけないように、夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えました。

彼らが、パウロたちにとって愛する者となっています。親が子をおもう思いで、福音を宣べ伝えるのに、自分たちが働いて、生活費をまかないました。仕事をしながら福音宣教の働きをしているのですから、相当な負担です。ここで、「労苦と辛苦」と表現しています。

¹⁰ また、信者であるあなたがたに対して、私たちが敬虔に、正しく、また責められるところがないよ

うにふるまったことについては、あなたがたが証人であり、神もまた証人です。

パウロは、母親のように優しくふるまったと先に言いましたが、次に父親のようにふるまっていることを話しています。ここから、父のようなふるまいを見せています。父は、子の前で、子が倣っていくことができるように、自らが模範となります。テサロニケ人たちの前で、信者として敬虔に、正しく、非難されることのないようにふるまいました。これは落ち度が全然ないということではありません。キリスト者として生きて行く基本を押さえているということです。敬虔というのは、神への恐れに関わります。主が悲しまれることから避け、主の喜ばれることを好んで行うことです。正しいというのは、人との関係や社会の中での関係です。そして責められることがないというのは、目に見える形で非難されることがない、ということです。

パウロたちが、いかに大胆に福音を伝えていたかは、私たちは分かっています。しかし、忘れられがちなのが、彼らがどれだけ、生活の中で主に倣っていたかということです。人の語っていることに私たちは注目しがちですが、その人が語っていることに生活の中に裏打ちされているか？ということです。

そのためには、共に生活をする必要があります。互いに知っていく必要があります。私たちは、語られていることだけでキリスト者生活を終わらせてはいけません。すばらしい、みことばの説き明かしを聞いても、その教えにかなった歩みが、基本的なところで出来ていない人たちがいます。それは、聖書の教えを知識としてはしっかり学んでいるけれども、その教えに従って生きている人たちに触れていないからです。逆に言うと、キリストの教えにかなった歩みをしている人たちは、何かしら、主に倣っている人々の信仰に触れています。何らかの形で触れているので、その歩みに倣っているのです。

¹¹ また、あなたがたが知っているとおりに、私たちは自分の子どもに向かう父親のように、あなたがた一人ひとりに、¹² ご自分の御国と栄光にあずかるようにと召してくださる神にふさわしく歩むよう、勧め、励まし、厳かに命じました。

パウロたちは、母親のように優しく接するという面があった一方で、しっかりと父親のように、威厳をもって、勧め、励まし、厳かに命じていました。どちらも必要です。母的な部分も必要ですし、父的な部分も必要です。

ここにある、「ご自分の御国と栄光」というのは、主ご自身が栄光の姿をもって現れて、すべての人を裁くことに関わっています。「Ⅱテモ 4:1 神の御前で、また、生きている人と死んだ人をさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現れとその御国を思いながら、私は厳かに命じます。」

マタイ 25 章には、イエスご自身が地上に再臨されて、人々が羊と山羊にえり分けられることを語っておられます。「25:31-33 人の子は、その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座に着きます。そして、すべての国の人々が御前に集められます。人の子は、羊飼いが羊をやぎからより分けるように彼らをより分け、羊を自分の右に、やぎを左に置きます。」右に分けられた人々は、最も小さき者たちに良いことを行って、それで永遠の御国に入るよう、その恵みにあずかります。左に分けられた者たちは、最も小さき者たちに何もしなかったので、永遠の火に投げ込まれます。主は、力強い方、栄光に輝く方で、すべての人々を裁かれます。

そのことを思いつつ、勧め、励まし、厳かに命じていました。先ほど引用した、テモテ第二 4 章には続きとして、みことばを、時が良くても悪くても、伝道者として宣べ伝えなさいということをパウロは、テモテに教えています。終わりの時には、「人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、自分の好みにしたがって自分たちのために教師たちを寄せ集め、真理から耳を背け、作り話にそれていく」と言っています(4:3-4)。私たちは、恵みによって救われました。しかし、世はこれからどんどん悪くなります。罪と不法がますます露わにされていきます。選ばれた者たちでさえ、惑わされていく時代になっています。ですから、私たちはしっかりと信仰の上に乗ることが必要で、母親のような優しさのみならず、父親のような厳かさが必要になるのです。

キリスト者というと、優しさだけが求められることだと思い込んでしまいます。けれども、仲間が主から離れているような時に、優しさと同時に、しっかりと愛をもって訓戒することが必要です。威厳が必要です。敬虔さが必要です。そして励まし、慰め、また勧めるのです。

2A 苦しみを受けたテサロニケ人 13-19

ここまでが、パウロたちのテサロニケ人たちの対するふるまいでした。次からは、今度は、テサロニケ人たちが、どのように彼らの働きを受け入れて行ったかを、パウロは思い起こさせています。

1B 御言葉による苦しみ 13-16

¹³ こういうわけで、私たちもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けるとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。

午前礼拝で、じっくりと学びました。12 節で、パウロたちが、威厳をもって、しっかりと勧め、励まし、それから厳かに命じていたことを見ましたが、それは、テサロニケ人たちが、神のことばの權威をそのまま受け入れていたからです。權威を認めるところに、權威の力が働きます。ちょうど、百人隊長のしもべが癒されたのは、イエスのことばをいただいたからですが、それは權威の下にある者たちが、その命令に従っているからです。

キリスト教会には、霊的な危機があります。それは、学んでいても、いつまでも学んでいないという問題です。神のことばを、天地の権能を持っておられる方から語られているものと受け止めないのです。それで、知識はたまっていくのですが、自分の生活を変えるまでの力になっていないのです。「イザヤ 66:2b わたしが目を留める者、それは、貧しい者、霊の砕かれた者、わたしのことばにおののく者だ。」神ご自身のことばなのだという敬意、恐れがないので、敬虔だけは装うことができますが、実を伴っていません。

世の終わりには、そのような人々が増えることを、パウロは警告しています。「Ⅱテモ 3:1-5 終りの日には困難な時代が来ることを、承知していなさい。そのときに人々は、自分だけを愛し、金銭を愛し、大言壮語し、高ぶり、神を冒瀆し、両親に従わず、恩知らずで、汚れた者になります。また、情け知らずで、人と和解せず、中傷し、自制できず、粗野で、善を好まない者になり、人を裏切り、向こう見ずで、思い上がり、神よりも快楽を愛する者になり、見かけは敬虔であっても、敬虔の力を否定する者になります。こういう人たちを避けなさい。」ここで大事なものは、見かけは敬虔だということです。神を知らない人々の話をしているのではなく、神を知っているとされている人々、キリスト者を自称している人々の間で、このような行いをしているのです。敬虔の力を失っています。それは、神のことばの権威を引き下げているからです。

¹⁴ 兄弟たち。あなたがたはユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会に倣う者となりました。彼らがユダヤ人たちに苦しめられたように、あなたがたも自分の同胞に苦しめられたからです。

テサロニケの人たちは、神のことばをそのまま受け入れていったために、苦しみも受けるようになりました。神のことばをそのまま受け入れていなければ、世に調子を合わせているので、世から憎まれることもありません。世が憎むのは、自分たちがキリストのものにされているからです。

彼らへの励ましは、霊的には先輩になる、ユダヤにある、キリスト教会が苦しみを受けていたことです。彼らもまた、同胞の民であるユダヤ人に苦しみを受けていました。テサロニケ人たちは、テサロニケにいるギリシア人なり、ローマ人なり、異邦人から迫害を受けていましたが、ユダヤ人信者は、同じユダヤ人から迫害を受けていました。使徒の働きを見れば、明らかです。

¹⁵ ユダヤ人たちは、主であるイエスと預言者たちを殺し、私たちに迫害し、神に喜ばれることをせず、すべての人と対立しています。¹⁶ 彼らは、異邦人たちが救われるように私たちが語るのを妨げ、こうしていつも、自分たちの罪が満ちるようにしているのです。しかし、御怒りは彼らの上に臨んで極みに達しています。

パウロは、ユダヤ人です。彼はユダヤ人として、自分自身がユダヤ人から受けた迫害を詳しく話しています。それは、主ご自身から始まります。主は、ユダヤ人指導者に対してこう言われました。

「マタ 23:34-36 だから、見よ、わたしは預言者、知者、律法学者を遣わすが、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して回る。それは、義人アベルの血から、神殿と祭壇の間でおまえたちが殺した、バラキヤの子ザカリヤの血まで、地上で流される正しい人の血が、すべておまえたちに降りかかるようになるためだ。まことに、おまえたちに言う。これらの報いはすべて、この時代の上に降りかかる。」義人や預言者たちの血を流したのは、まぎれもなくイスラエル人たちでした。そして義なる方イエス・キリストをこれから、殺そうとしています。それゆえに、報いが降りかかると言われていますが、それが紀元後 70 年の、ローマによるエルサレム破壊です。パウロが語っている、「御怒りは彼らの上に臨んで極みに達しています。」というのは、そのことのことです。

日本では、キリスト教の歴史に残る大迫害がありました。キリシタンへの迫害です。映画「沈黙」には、迫害の急先鋒が、実は転んだキリシタン、背教した信者たちであることが描かれています。神を知らない人々ではなく、知っている人たちが、敬虔に生きようとしている者たちを迫害するのです。これが、イスラエルの間で起こっていました。神を知っているのに従っていない者たちが、従っている者たちを迫害します。

そして、「私たちを迫害し」と言っていますが、これはパウロなど使徒たちのことです。特に、ユダヤ人がパウロたちを迫害しているのは、異邦人に対して福音を語っているからに他なりません。異邦人が神に立ち返ることを、ユダヤ人は否定しません。彼らが、割礼を受けて、律法を守ってユダヤ教に改宗すれば、救われると信じているからです。何に対して怒っているかと言えば、割礼を受けないで、異邦人のままで、ただ、みことばを聞いて救われることを宣べ伝えているからです。そして、テサロニケでも、ユダヤ人たちが騒動を起こし、ベレアに逃げた彼らのところにやっついて、ベレアでも騒動を起こしました。

そして、自分たちの罪が積みあがって、神に御怒りが極みに達しているのですが、今、言いましたように紀元 70 年に、ローマがエルサレムを破壊して、世界に離散する民となったところで成就します。ユダヤ人は、終わりの日には救われるという約束があり、憐れみを受けますが、その時には、イエスがメシアであることを悟り、それで悔い改めてこの方を受け入れるからです。

ここで大事なのは、主に復讐を任せることです。キリスト教会はここで失敗しました。教会は、歴史を通じて、ユダヤ人を迫害してきました。逆に迫害したのです。それは、ユダヤ人が自分たちを迫害して神が彼らを裁かれるということ、自分の手の中に入れたのです。神の裁きを、自分の手で下していったのです。ユダヤ人が神に呪われた民として教会が迫害して、ユダヤ人が救われることで神のご計画が完成するのに、むしろ今は、教会が、イスラエル人が救われるのを妨げて、罪を積み上げていると言ってもいいのです。間違いは、裁きを神の手にゆだねないことです。主が、迫害に対して裁かれることについては、テサロニケ第二 1 章で詳しくパウロが語ります。主に裁き

を任せ、敵に対しては悪ではなく善で報いるということを徹底させないといけません。

2B 再会を切望するパウロ 17-20

このようにして、テサロニケの人たちが、みことばのゆえに苦しみを受けていることを話しました。そこでパウロは、何とかして彼らのところに行きたいと切望している思いを次に話します。

¹⁷ 兄弟たち。私たちは、しばらくの間あなたがたから引き離されてきました。といっても、顔を見ないだけで、心が離れていたわけではありません。そのため、あなたがたの顔を見たいと、なおいっそう切望しました。¹⁸ それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。私パウロは何度も行こうとしました。しかし、サタンが私たちを妨げたのです。

パウロは、ずっと彼らに顔を見せられていない理由を話しています。実は、何度となく行こうとしていたのです。ところが、サタンが妨げていたと言っています。似たように、神の働きをサタンが妨げる、霊の戦いについて、ダニエルが記していますね。彼が断食を始めて三週間後に、主の使いが彼のところに来ますが、なんと、主の使いは彼が祈り、断食を始めた時から彼のところに行こうとしていましたが、ペルシアの君が妨げて、ミカエルが助けに来るまで、留められていたことが書かれています(10章)。同じようにして、妨げられていました。

福音の働きについて、サタンが何とかしてその働きを無にしようとするのはしばしば起こります。しばしばある手段は、分裂や混乱、争いです。福音が前進しようとしている時に、仲間の間にちょっとした誤解を生じさせて、疑心暗鬼になり、互いに対立させて、仲間争いをさせることです。あるいは、物理的に連絡をするのをさせないこともあります。ここでパウロが、行こうとしているのに妨げられるように、物理的に連絡ができないようにさせます。私も、ある働きで、相手側と音声で連絡を取ろうとしているのに、その時に限って通信状況が悪くなることがありました。

¹⁹ 私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのは、いったいだれでしょうか。あなたがたではありませんか。²⁰ あなたがたこそ私たちの栄光であり、喜びなのです。

1章でも、しめくりは主の再臨でした。ここでも同じです。主イエスが再び来られる時、この希望があるからこそ、困難を耐え忍ぶことができます。

今、パウロは、イエス様が戻って来られたら、報いがあることを教えています。「冠」とありますね。これは、地上で行ってきたことに対して、主が報いを与えられるのです。その報いの冠が、「御前で私たちの望み、喜び、誇り」の冠だと言っています。これは、まさに彼ら自身です。彼らが信仰の実を結ばせていること自体が、神の前では自分たちの冠になるのです。福音の働きをしている

者たちにとって、何が報いか？と言ったら、人が救われて、救われるだけでなく、信仰に留まっていることです。そして、変えられていることです。その実こそが、自分が主の前で、よくやった、よい、忠実なしもべだと言ってもらえるのです。

ここまでして、パウロはテサロニケ人たちを慕っています。そして、3章前半に今度はテサロニケの人たちがパウロのことを思っているという知らせが入ったことを話しています。それは次回、見ていきましょう。